

第 8 回

～洋書絵本の専門店が贈る～

『のんびり洋書めぐり』



Ehon House

(株)岩崎書店 絵本の家事業部 仕入担当

望月真由



■ 探しもの絵本のジャンル

じっくりと描かれた細かなイラストの中から、お題の答えを探す。幅広い年齢層の子どもたちに人気の「探しもの絵本」というジャンル。洋書絵本でも数多く出版され、その形態は実に様々、新刊も数多く出版されています。今回はこの探しもの絵本というジャンルを深掘りしてみたいと思います。

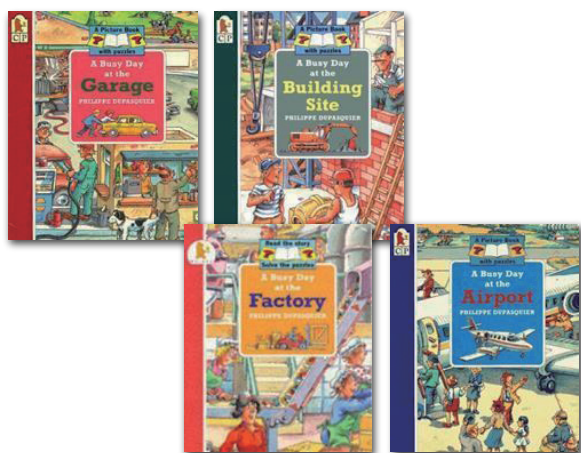
探しもの絵本の代表格と言えば、『ウォーリーをさがせ!』（フレーベル館 1987）でしょうか。1987年イギリス人イラストレーター、マーティン・ハンドフォードによって出版され、世界中で翻訳されています。当時 Walker Books 社アートディレクターであったディビット・ベネットは、スイス人絵本作家フィリップ・デュパスキエの名作 Busy Places シリーズのような本を作り、ボローニャ・ブックフェアへ出品したいとマーティンに相談を持ち掛けました。制作の過程で、「事細かに描いた詳細なイラストに、特定のキャラクターを登場させて探すようにしたらおもしろいのでは」との意見が出たため、マーティンは発見しやすい赤と白の縞模様の服を着せた、「ウォーリー」とい

うキャラクターを誕生させました。斬新なアイデアは瞬間に子どもたちを虜にし、探しもの絵本というジャンルは大きく成長していきました。

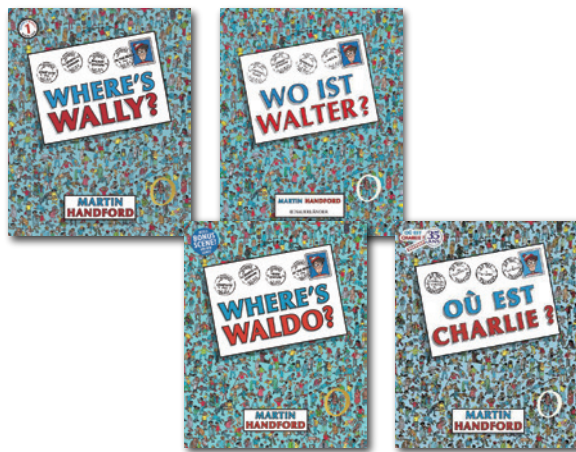
さらに数年後、このジャンルに新たな波が訪れます。1992年、アメリカスカラスティック社は、『I SPY』を出版します。この絵本の革新的な点は、イラストではなく、写真から対象を探すこと。謎解きのお題（英語では韻を踏むライムで作られている）があり、その答えを探すことでした。絵を探すだけでなく、リアルな対象から謎解きの答えを探すという、よりインタラクティブな内容は、探しもの絵本というジャンルを飛躍的に進化させました。世界約30か国で翻訳され、日本でも同年『ミッケ!』シリーズ（小学館）として発売されて人気を博し、現在ではシリーズ累計930万部のベストセラーとなっています。

■ 探しもの絵本と学習効果

さらに注目したいのが、この「答えを探す」という探しもの絵本のアイデアは子どもたちの学習意欲を向上させるうえでとても有益で、海外出版社が手掛



スイス人絵本作家フィリップ・デュパスキエの名作 Busy Places シリーズ (Walker Books 1984～)。工場や空港、ガレージなど日常シーンを詳細に描いた元祖「探しもの絵本」。



アメリカでは WALDO、フランスでは CHARLIE、ドイツでは WALTER など、「ウォーリー」は各国で馴染みのある名前に変わり、世界中で親しまれています。



ける多くのワークブックに取り入れられているという点です。

アメリカの子ども向け雑誌『Highlights For Children』は、その先駆的存在です。発起人ゲーリー・メイヤーズはコロンビア大学で心理学博士号を取得後、余生を子どもたちの教育に捧げたいと決意。妻キャロライン・クラーク・メイヤーズとともに Highlights 社を立ち上げます。1946年に刊行したこの雑誌は、6歳から12歳の子どもたちを対象にした月刊誌で、子どもたちがいかに楽しみ、かつ学ぶことができるかを考え抜いた誌面づくりに徹したといえます。「Fun with a Purpose（目的のある楽しみ）」をスローガンに掲げ、お話やクイズ、ジョーク集、パズルなどが誌面に並び、その中でも特に力を入れたのが絵探しページだったといえます。

現在 Highlights 社は、より書籍ジャンルを増やし、ワークブック Highlights シリーズも刊行され、数々の賞を受賞。世界中で支持されるワークブックとなっています。このワークブックでも、Highlights の十八番である「絵探しページ」が大人気。ひとひねりもふたひねりもされた絵探しは、子どもたちを夢中にさせる難題ばかり。新たな教育法の研究が続く中、なぜ戦後から長年変わらない「絵探し」という手法が今でも支持されるのか。それは、ゲーリーが掲げた「Fun with a Purpose」という信念こそが、子どもたちの学びの根源であり、いつの時代も変わらないからではないでしょうか。

たくさんの絵もしくはもののなかから、お題の答えを探す。このシンプルな動作は、子どもたちの洞察力、観察力、集中力など多くの感性を研ぎ澄まし、そし

て答えを見つけた時の満足感、わからないことがわかる喜びであり、学習意欲を呼び起こすことができます。特に、学校でこの英語版探しもの絵本を手にとってほしい理由は、この英語の本を使って「わからないことがわかる」経験ができるからです。

さらに、今回増刊号に掲載されている Can you Find it? シリーズは、簡単な英単語が書かれただけのシンプルな構成で、教室でシェアしやすい内容となっています。というのも、発行元アメリカの Capstone 社は、全米の小中学校で利用される学級文庫に多くのタイトルを採用されている、いわば「学校図書」のプロ。教室で、大人数で本をシェアする想定で本づくりが行われており、この工夫は現地の子どもたちだけでなく、英語をこれから学ぶ日本の子どもたちにとっても、学習意欲を伸ばす格好の材料となるでしょう。

■ 日本 の 英 語 学 習 に「Fun with a Purpose（目的のある楽しみ）」を

2011年に小学校英語教育必修化が始まり、2020年には3、4年生の外国語活動が、5、6年生の英語科として必修化されました。2019年の幼児教育・保育無償化制度によって、プリスクール利用も身近となり、現在では英語に触れ始める年齢がぐっと低くなりました。近年、子どもたちを取り巻く英語学習環境は大きく変化しています。

また、日本での英語学習の背景には、大学受験という存在があります。2020年の大学入試改革の余波もあり、英語資格を入試に取り入れる傾向は、中学受験にも見受けられるようになりました。小学校の外国語活動とも相

まって、今や多くの子どもたちや保護者にとって英語学習の主要なモチベーションは、将来の受験に役立つからといっても過言ではないでしょう。

どんなモチベーションであれ、英語を学ぶ必要性や機会が増えたことは、日本の英語力の底上げに貢献していると思います。しかし、2011年に小学校英語教育必修化がスタートした大きな目標のひとつは、「英語の実践的コミュニケーション能力を育成するための素地をつくる」ことでした。その数年後、私は小学校英語指導者の資格を取得しました。その過程でもっとも大切だと学んだことは、英語体験を通じ、コミュニケーション能力を養うということでした。つまり、ペンのいらない、音楽や体育と同じような、英語を実際使ってみるという実技を通じ、子どもたちのコミュニケーション能力や国際理解感覚を養うということでした。

それゆえに現在、英語学習環境は変容していても、私は実技としての英語、つまり英語を体験するという考え方が大切だと思っています。受験に役立たないじゃないかという波に押され負けてしまいそうですが、「外国語を使うってこういうことなんだ」という将来につながる体験を、学童期だからこそ確保してほしい。外国語学習の最も大切なコアを、忘れてはならないと思います。探しもの絵本に込められた「Fun with a Purpose（目的のある楽しみ）」こそ、外国語学習を始める子どもたちに手渡したい体験だと思うのです。

■ 子どもたちの「おもしろい」ことへの嗅覚

子どもたちが英語を学ぶうえで大切なのは、実際に英語を使ってみるということだと述べました。そしてさらに、英語を使ってみる体験は、「おもしろい」体験でなけれ

ばなりません。英語を日常で不要としている子どもたちでも興味をもってもらえるような、彼らを惹きつける「おもしろさ」が必要になってきます。英語を勉強としてではなく、体験させる最重要ポイントは、「おもしろさ」「わくわく」だと思います。

学童期だからこそ、英語を実技としてなぜ体験させたいのか。それは彼らの「おもしろい」ことへの好奇心が、大人の何倍も湧き出ている時期だと思うからです。

シナスタジア（共感覚）という言葉をご存じでしょうか。あらゆるものに同時に五感を作動させることができる能力で、単語に匂いを感じ取る知覚現象が起きる人々もいるそうです。もし、おもしろいことやわくわくすることが匂いを発しているとしたら、子どもたちは大人の何十倍もの嗅覚を発動させ、それを嗅ぎ取るでしょう。子どもたちの「おもしろい」ことへの嗅覚は、絶大です。「これはおもしろいことだぞ」と彼らの嗅覚がキャッチしたら、全感覚を研ぎ澄まし、その「おもしろい」ことが何であるかを分析します。たとえそこに「わからない」言葉や知識があったとしても、彼らにとってはあまり問題ではありません。

私は子どもたちに限って言えば、この「おもしろい」体験こそが、言語習得に欠かせない体験だと思います。子どもたちの好奇心が生み出すパワーには、脱帽することがあります。その好奇心を、並ならぬ嗅覚を、英語の本に向けられたら。英語圏で子どもたちのために作られた英語の本こそ、「おもしろい」英語体験にぴったりののです。世界中の大人が子どもたちに「おもしろい」と思ってもらうために、頭をひねり考え出した本たちこそ、英語学習を始めたばかりの子どもたちが体験すべき英語の世界だと思っています。



本だけに留まらず、ビンゴなどの玩具やゲームソフトなど、『I SPY』の世界観はあらゆるジャンルで商品化され、それぞれの分野で輝かしい賞を受賞しています。



現在のHighlights Magazine(6歳から12歳対象:写真左)。幼稚園対象のワークブック『Kindergarten Big Fun Workbook』(Highlights Press 2017:写真右)。半世紀以上「絵探し」にこだわってきた職人技が光ります。



『A Can-You-Find-It Book: School Days』(Capstone 2020) お題の答えを探したいのに、散らばるオブジェクトがおもしろくて、どうしても寄り道してしまいます。

